

英文法の説明に対する新しいアプローチ (2)

平見 勇雄

A new approach to how to learn English grammar (2)

Isao HIRAMI

Abstract

This paper is about how to teach English in respect of English characteristics. I think any language has its own characteristics and it reflects the grammar, words and sentences. So it would be very useful for the students to have the background knowledge of English and learn English in respect of its common character.

Key words : different characteristics between Japanese and English, two different factors, English education

キーワード : 言語間での異なった特徴, 相反する特徴, 英語教育

はじめに

昨年は代用と省略という点から英語文を考察した。この二つが英語全体に浸透しているという点からまとめたものであるが、学生に英語を教える際、一つのあある特徴がそれぞれのあり方にも浸透していることを理解させることによって、英語という言語を改めてとらえることができることから英語の本当の理解につながるのではないかという提案を述べたものだった。一つ一つの文法を習った後に、実は別々で一見関連していないように見えるそれぞれの文法項目が、似た原理から捉えられることから英語を見てもらうことを提唱し

たのであるが、今回は相反する要因という点からいくつかの例を見ていきたい。文が具現化する際には全く異なる逆の特徴を持った要因が作用して今ある用例に落ち着いている場合がある。逆の特徴がお互いにせめぎ合う中で一つのあり方が実現している。その観点から英語を見てみたいと思う。

1 以前挙げた例の紹介

3年前に『英語の所有構文に関する考察』という本を書いたが、そこに以下のような実際の例文を取り上げた(77~81)。簡単に紹介すると、以下のような文

を高校の授業で習う。

Do you mind me opening the window ?

Do you mind my opening the window ?

mindの後ろには目的格と所有格の二つを置くことが可能である。それはmindという動詞の後ろに目的語である名詞が置かれているわけであるから私という名詞が来た場合、meという目的格になる。一方openingは動名詞である。したがって名詞としての性質を残している。そのためopeningの意味上の主語である所有格のmyを可能にしているのである。動名詞は品詞の分類上、名詞ではあるものの典型的な名詞ではない。そのような特徴を持つため、名詞の格を選択できる結果となったのだと考えられる。

もう一つ、取り扱った例が以下の表現である。

this morning

this afternoon

this evening

tonight

なぜtonightだけがthis nightではないのか。それはnight and dayという表現からわかるようにnightはdayとの対比でよく使われる。そのためtodayという表現が存在している以上、対応関係にあるtodayが強く想起されることから、結果としてtonightという表現が選ばれたのだと考えられる。この場合は先ほどの例と違って二つの選択肢が可能となったわけではなく、一方が選ばれ定着した。

二つの要因が衝突した場合、二つが同時に並行して存在する場合もあれば、一方に固定化する場合もある。

このような例から、言語化する場合、対立する要因が働いて言葉の成立に関与していると推測することができる。

これらの用法を一つに整理して英語教育を行うことは、単なる暗記ではなく、いくつかの要因が働いて言葉が確立していることを知らしめることができる。背後に、ある要因が関与して成立していることを知ることができることは言語の本質に迫ることのできるいい

機会だと思う。

2 日本人が特殊な表現と感ずる英語の表現

以上紹介した例は英語の場合であって日本語と同じ要因が見られるわけではない。言語というのは個別的なものだからである。

これらの例に見られるような、対立する要因が英語に反映されていることは他にも考えられる。おそらく次のような場合もそれに当たるだろう。

高校の時に英語の授業で以下のような文を習う。学生だった当時は奇妙な英文だと思ったし、日本語とずいぶん違うと感じたものだ。それが物主主語と言われる文法項目である。以下のような例文はその代表的なものと言えようか。

The rain prevented me from going out.

What made you think so ?

上の文を直訳すると「雨は私が外出することを妨げた」となり、意識すると「私は雨が降ったので外出できなかった」となる。下の文の直訳は「何があなたにそう思わせたのか」という訳で「なぜあなたはそう思ったのですか」という意味である。もちろん、自然な日本語に直した訳を逆に英訳したWhy did you think so?と意味的に全く同じニュアンスではないだろうし、それなりの使い分けがされているはずである。

しかし日本語なら、かたい文学的な表現のようで、普段の日常会話では使われることのない文である。したがって両言語間で使われ方の頻度や、聞いた時の印象は大きく異なる。日本語なら何がしかの意図でもない限り（たとえば講演会やシンポジウムのようなイベントのタイトルで、注目を引くなどの特別な効果を狙うことでもない限り）、滅多にお目にかからない表現だ。

しかしなぜこういう表現が英語にはあるのか。もっ

と言えば、なぜ日本人はこういう英文を奇異に思うのか。さらにこの表現は英語の他の表現と何らかの関連性があるのだろうか。私が英語の所有構文を研究した限りの経験から言えば、おそらくこういう極端な文にこそ英語特有の本質が隠されている。

おそらくどの言語にも（ここで考察するのは英語と日本語のみであるが）ある特徴がそれぞれのあり方でその言語に浸透している。これを指摘した重要な著作の一つが池上嘉彦氏の『「する」と「なる」の言語学』（1981）である。簡単に言えば、英語は「する」的な表現に傾いているし、日本語は「なる」的な表現に傾いているという主張で、日本語は物事を自然発生的にとらえる癖があるのに対し、英語は物事が起こる際、何かにその原因を求める傾向が強いことから表現に差が生じると考えられる。以下で少し紹介したい。

3 外国人が特殊な表現と感じる日本語の表現

2では日本人が英語を読んだ際、奇異に感じられる表現を挙げたが、逆に外国人が日本語を習うと不思議に感じる文というものもある。それが「なる」が使われるいくつかの表現である。たとえば次のような文だ。

私たち結婚することになりました。

明日は会社が休みになります。

英語を母国語とする人で日本語が達者になった外国人は「することになりました」という表現に最初は違和感を持ち理解しにくかったという。これは日本人はある出来事が成就した際、自分一人の力で物事を成し遂げたととらえるより、まわりの人達の助けや協力があって成し遂げられたという捉え方を好む傾向のあることから、まわりを意識した言い回しになる。上の文は結婚するのは自分達の意味で成立しているが、それに加えてまわりの応援や協力のおかげがあること、決して自分達だけで決まったことではない、とい

う捉え方が日本人に好まれるからこそ使われる表現である。会社の休みもそうである。誰かが会社を休みにすると決めたのだが、まわりの協力や雰囲気から自然と休みが決まったという捉え方がされている。交通機関の例の方がわかりやすいだろうか。「列車の発車が9時15分となりました」という表現を聞くと、背後にお客様のご理解、ご協力があって時刻の変更が可能になったというニュアンスが出る。これが「なる」的表現の効果の一つである。

4 英語の表現の間での関連性

英語らしい表現の一つである物主主語に戻って文を見ると、英語はそういう効果とは逆の方向に向かっていると感じられる。「私たちは雨で外出できなかった」「なぜあなたはそう思うのですか」という表現に、外出できなかった原因や、そう思うことになった原因をよりはっきりさせることを意図した文となっているからである。つまりある出来事の成立にさまざまな要素のかかわりを巻き込んで、それを引き起こした主体をぼかす方向に進む日本語の特徴とは違い、自分たちが行為を行うという主体をはっきりさせたり、さらに前の段階にまで原因を追ってその原因までをも明らかにしたいという姿勢が英語には見られるのである。

日本語が自然発生的に、事態が起こる表現に向かうのに対し、英語は事態の原因をはっきりさせる方向に進んでいる。それがそれぞれの言語の根底にあるため、日本語を母語とする人には、土台が異なっている英語の表現が奇異に映るし、逆に英語を母語とする海外の人には、英語とは正反対の特徴が土台となっている日本語的な表現（先ほどの「することになりました」のようなもの）が奇異に映る。この点で日本語と英語の特徴は両極端の位置にある。

この英語の特徴をさらに考察すると、このことが一つの対立を生み出し、相反する要因のせめぎ合いを生む原因となっていると思われる。英語には感情を表す

動詞の多くが他動詞として存在している。次のような語だ。

amaze, disappoint, excite, frighten, interest, please, surprise, etc.

これらは他動詞としてそのまま使われることもある一方、我々日本人が英語の授業で見る用例の多くは受動態の形式である。たとえばI am amazed at, I was disappointed at, I am excited at, I am frightened of, I am interested in, I am pleased with, I am surprised at, などである。しかも受動態の形でありながらbyが前置詞として出てくることはまれで、多くがatやinのような別の前置詞に取って代わり固定的な表現として使われる。fearのような動詞もあるにはあるが、圧倒的に上記のように何か原因があって感情が湧きあがるという意味合いを持つ動詞となっている。そしてここには二つの要因が衝突していると考えることができる。

一つは英語というのは人が表現の中心となる特徴を持っていることである。詳しい説明はスペースの関係で省略するが、これはいくつかの事実から間違いない。そのため人を主語にして（形の上では）受動態の形で表現することが圧倒的に多い。

一方、先ほど英語では出来事や事態は自然発生的に起こると捉えられているのではなく、誰かが、あるいは何か引き起こすと表現される傾向が強いと述べた。だからこそ英語には、そのような捉え方をした物主主語のような英文や、感情を引き起こす語が他動詞の形で存在すると考えられる。もう少し言うと、人が中心となる特徴から主語は人間である英文が普通である一方、事態を引き起こした原因を何物かに求めてしまう特徴も同時に持っているため物主主語のような英文が存在するようになったということである。

感情を表す語に関して、言語の種類とは関係なく、我々がどのようにその情を持つに至るかを考えてみる

と二つの可能性がある。たとえば驚くという感情の場合、極端な例で言えば、他人から驚かされたと思う場合と、逆に対象物にはその意図がないのに自分に驚きの感情が湧いてきた場合の二つの感じ方がある。それが英語では前者の場合他動詞として言語化されているし、逆に自分が驚いたという場合は自分を主語として受動態で表現される。そうするとこの使い分けがうまくできる。事実、これらの動詞は受動態になっても「～された」という感覚が残っていないからこそbyではない他の前置詞が使われているのである。もっと言えば英語では受動態という形式に日本語の「なる」的表現が担わされているのである。

そして人だけではなく何物かに事態の原因を求める特徴は次のような表現とも関連していると考えることができる。

This book sells well. (この本はよく売れる。)

everything money can buy (お金で買えるものすべて)

本を売るのは人であるが、その人の売り方に能力がある場合もあれば、本自体にその力があると捉えることもできる。下の表現は「お金で買えるものすべて」という意味だが、お金自体に力があるからこそ表現できるのである。つまり英語では感情の表現だけでなく「もの」がある出来事を引き起こすものとしてしばしば言語化されているのである。

繰り返すと、先ほど挙げたWhat made you think so?のような例文で、人を中心とした表現を選ぶならWhy did you think so?となるし、その原因を物にも求めることができる特徴が浸透しているからこそ、このような物主主語の文が普通に存在するのである。人を中心として表現したいという特徴と、物にも出来事を起こす力があり、それも言語表現として適切であるという両方のせめぎ合いが二つの表現を同時並行して存在せしめている。

こういった例からも、背後にある共通した傾向や特徴がいくつかの英語表現に反映されていることがわか

る。一見、関係のない文や語であっても、ある視点から例文を検討するとある傾向が見えてくる。そこにはしばしば一つの対立する要因があり、その特徴が言語表現の多様性を生み出していると考えられるのである。

5 まとめ

一つの特徴から英語を再検討することは英語教育の観点から見て意味あるものだと思う。単に英語と日本語の違いの理解だけでなく、言語には法則や約束事が背後に隠れており、しかもその法則や約束事は決して一つの文や語に留まるのではなく、言語全般に浸透し広がっていることがわかる。その浸透している特徴の点から英語教育を行うことは一段階上の、しかし決して理解し難いほど難解な内容ではない。多くが高校生に理解できる程度のものであり、しかも高校の授業で扱う範囲の例文や語である。受験一辺倒の教育が批判されるのであれば、こういった内容こそが授業内容に加えられべきであろう。

あるいは実際に授業で取り上げられることはなくとも学生に英語を教える教員がこういう特徴を把握しているだけでもよい。授業に加えられなくとも、こういっ

た内容を知っている教員と、高校で扱っている内容に終始しているだけの教員の間には授業の質において、目には見えなくとも大きな違いが長い目で見れば出てくるのではないかと思う。引き出しの限られた教員と、一歩進んだ知識を持った教員とでは、おそらく英語の奥深さや難しさ、楽しみを学生に与えられる量に差が生じ、3年間という期間の授業を通じてその違いが滲み出るはずである。

昨今、受験に関して単なる暗記に終始することが教育の批判にさらされ、しばしば「抜本的に」教育を変えることが声高に叫ばれることがあるが、少し視点を変える教育内容を加えるだけで暗記中心ではない教育に持って行くことはある程度可能である。日本がこれまで行ってきた教育に欠点や足りない所はあったにせよ、他国と比較してもこれだけ他国に誇れる国に繁栄してきたことを考えると「抜本的」改革がそもそも日本の英語教育に本当に必要なのか、私は常々疑問に感じている。

その意味でもこれまで教えてきた内容を別の視点からとらえ直すことで、英語教育に新しい刺激や視点を加えることができ、英語という言語の理解を深められる可能性を強く感じている。

注)

以上の内容は多くを認知言語学の第一人者の池上嘉彦氏の主張を紹介し、英語教育への応用として活用してはどうかという提案としてまとめたものである。また中間構文と呼ばれる This book sells well のような英文の検討はかなり研究が進んでいる。したがってその中には私が今述べた内容と同じことを主張している研究者もいるはずである（私の勉強不足で詳しい参考文献は今回あげていない）。ただ、この論文では構文自体の考察を行うことが目的ではなく、相反する要因が対立する内容という観点からまとめ、英語教育としての可能性を論じることが目的である。したがって日本語教育と国語教育の間で、いくつかの文法論が違っている場合があるのと同様、あくまで私が提案した視点から例文を見た場合の共通性ということであって、物主主語や中間構文それぞれの専門的な研究を論じたものではない。また池上氏の論に関して私の勝手な解釈や誤解があり、そこまでの主張はしていない場合も含めて、結論の責任はすべて筆者にあることを断っておきたい。

参考文献

池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館

————— 1991 『英文法を考える』筑摩書房

平見勇雄 2006 英語所有構文に見られる英語全体に浸透している言語傾向との接点に関する考察 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要11. 129-141.

————— 2019 英語の所有構文に関する考察—認知言語学的アプローチから見えてくること ふくろう出版